



芝月

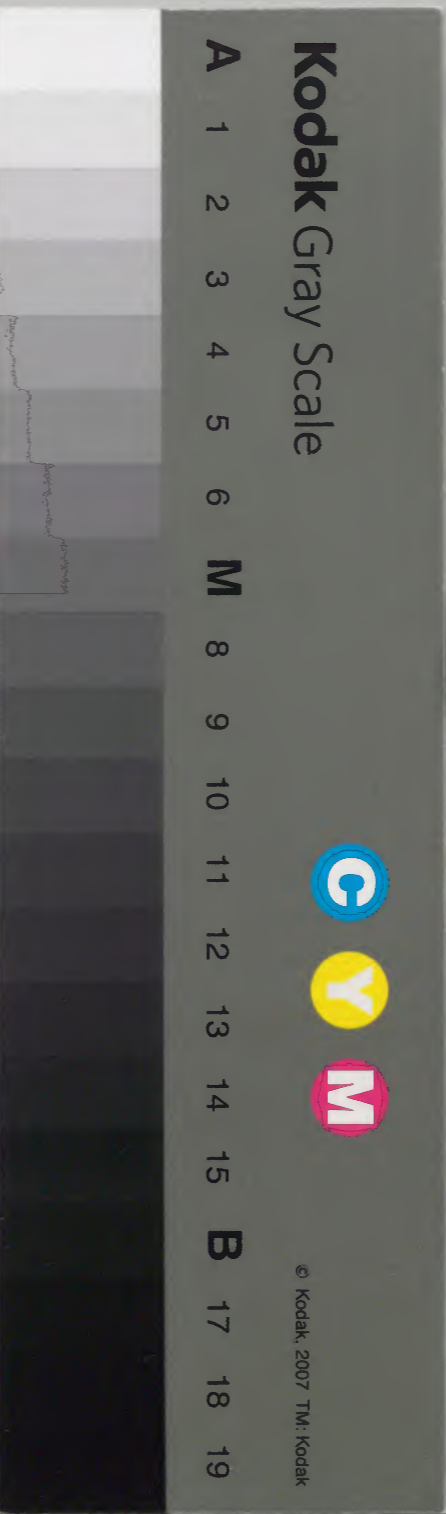
五十



内閣文庫			
函架	冊	號	類
二	〇	〇	和書

(057)

内閣文庫	
番號	和 28420
冊數	100 (50)
函號	211 300





明治十二年
東京



汝屍卷之五十 正徳



中原康富日記梅抄
和方源方抄梅抄

康食無様の章

新古と昔既の章

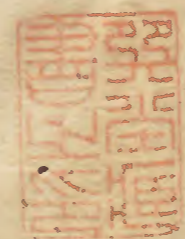
凡為僧者

風好と大

奸巧 正是

能史の章

天はかた



高師直の章
宵月智我公法服
夜をほろの井とぬ

参附善極湯

高師直の章

かきつあまのの章

古いものり

錫 慰

幼児のこゝ

春日井那志の章

對揚の章



尾州誌事社從後永年月

○權大外記中原康富日記板抄

永八年五月五日淳字祭百三十騎

信系按中世以今五月五日也

子息大學助範職本名光職二系為法名字號故改之

按二系福照院關必名端臺也光職之初創

因一是也一一誤同之云

應永六年二月十二日丁亥二夜秋奠上丁上卿權

中納言家俊以云

府仁又昭已後終了

同廿七年九月十日室町殿醫師高天被禁獄父

子三人云此間仕狐之沙汰風聞云十月九日高

天昨日流讀岐國俊經朝臣同國被流云々是皆
狐之輩也云々

按しし云飯綱位いとい著の數は

文安五年八月一日八朝礼之事何事の時より
ありし心より尋りし後多相院未の時より出
來り也但し不得而久性而後先代より沙法初より
謙亮より事終りし心而後傳也法教の如く此の記
此事見之在事其心也復付き亦在日尾花の漸
事其由来何事心自然及及欲し心之同之給き

八朝風俗後成恩寺為の公事根源は此の記
是より尾花漸の心も直令院借心記より

又此の記より心ありは及侍りし心也關東儀
式道始より是は徳川が心法例よりあり
事かりし心

武教法判位始事云々空町為伊勢國幡為法
供より作下之有也判始法判事法名多を云々
法字は彼有之或亦以前字を伴ふ後去し以何字
一法用也二撰を云々一法作し自然先之其事不難
作也及但し之亦紀伊儒者云々撰心は云々
並院為普光院為兩代義の字也協定院法判の
為字也云々

判は花押の事是れ者云々侍の字を用ひ

國も亦字の字を^しこの^{こと}も^いふ字ありぬ
判め古風を^しい^はる^るの^くり

一月十五日^き世方天下庶人三日疾并咳病^布

と^時も^一あ^日の^病も^あり^二日^疾も^あり^三咳^病も^あり^四病^布

永^甲子の^老富士^山境^一に^人こ^二三^四日^咳病^を煩

ひ^一て^二下^三因^四り^五と^六

又^あ六^も三^月ま^に難^後の^決云^をも^を賣^らせ^るを

あ^いり^のり^りと^は字^のあ^まり^と云^り云^あい^押さ^あり^き

な^い物^もり^より^のり^つあ^る為[、]内^もあ^りと^いふ^物と^書

の^より^には^はる^るの^こと^も

宝^徳二^年九^月尾^道を^後代^所置^之減^四る^の可^通を^云

代^徳為^らる^まき^と十^月の^注を^按減^四田^郷度^と云^り

此^北室^町家^陸盛^の時^年も^付ま^りも^云月^五日

草^敷の^ゆか^りと^云は^る六^月十^六日^の嘉^定の^注

か^んと^いふ^人を^世の^事是^利の^時も^あり^はら^れら^ると^云

も^りり^一但^し内^の注^のか^んと^いふ^事も^あり^に於^て

廷^の注^のを^細く^注せ^りに^抄字^の行^事に^漏る^る方

も^かん^とい^ふ事^もあ^りん^亦六^月七^日の^注今^亦師^四

系^河系^納涼^とて^経や^り妙^との^注も^を世^とり^の

俗^とい^ふ事^もあ^り應^永永^とり^康定^の日^注も^あり^侍氏

此^代以^てに^於て^古俗^の注^儀式^も形^の如^くは^られ

し^らる^る應^仁文^明と^は何^のゆ^えも^康定^の注^も

あめ天の字しよカ雄命き

信系按ふ非代巻よてアメタチカラヲと讀きり

月よよあめ天の字しよカ雄命き

此爰字月表よてしよカ雄命き

公天ありあめ天の字しよカ雄命き

やまかあめ天の字しよカ雄命き

ちよあめ天の字しよカ雄命き

しよあめ天の字しよカ雄命き

しよあめ天の字しよカ雄命き

信系按ふ月表の字しよカ雄命き

のしよあめ天の字しよカ雄命き

右表有法中初分讀亦抄よんてしよカ雄命き

詞のしよあめ天の字しよカ雄命き

此抄いりしよあめ天の字しよカ雄命き

るまも右と信家のたまふしよカ雄命き

しよあめ天の字しよカ雄命き

しよあめ天の字しよカ雄命き

凡れ古はあめ天の字しよカ雄命き

地心してあめ天の字しよカ雄命き

あめ天の字しよカ雄命き

はあめ天の字しよカ雄命き

すも古はあめ天の字しよカ雄命き

あり古蹟の思徳ありはるる事外しとて是実
の事なる人亦一の公なる事也

○ 在り我尾府下医伴参附姜桂湯と祈し古病人ふ
ふする事方あり歴代方書に不載之或曰明医張振
甫我尾府を去りて三仙教人參を以て自れ三仙と依
信症の病ありて一と存或医竊と名はせしふ
参附姜桂湯を以て姜附湯と準し或曰四逆湯と
準し甘草を加ふ為依此書に當濕劑君臣佐使の
方ありむかひに歴代方書に載らざる今人是を
依り問し害は事少なりは再控し可なり
○ 佐州佐宿の祖官鹿食無嫌の章を拜し安らふ火

を釋しおしくは仙術の二より出たりとてこれし
しものをみるは神代の有山ありは業盡有情雖放
无生故宿生身同證仏果とあり是をなく仙方
の伝承也

○ 康永三年十月八日從二位源直義宝積院に奉
しつる野山全刻三時辰に納し
是氏直義善慈國
作三人の巻也
於世四尊の分人をすめりて和分を証しあり是納り
らむるも分の中よりして面白く是れを奉留む奉
書凡百十九首あり
直義

此の書もいへば中とてあり
猶あもを御したり

師直

白紙の紙に書かれた文字

おのゝこゝろにふりかへし

兼好

むらさきの紙に書かれた文字

まゝの紙に書かれた文字

紫の紙に書かれた文字

しるしの紙に書かれた文字

伝系按ふ太平記の師直の字をよみて野原の如く
きり白紙の紙に書かれた文字は作られた
まゝの紙に書かれた文字

○新古と春立公を

権政太政大臣

しるしの紙に書かれた文字

あまの紙に書かれた文字

或抄曰此方の巻紙は昔の紙にけさく今より
吉野古紙の紙に書かれた文字
きりしるしの紙に書かれた文字
しるしの紙に書かれた文字
しるしの紙に書かれた文字
しるしの紙に書かれた文字

伝系按ふ昔の紙に書かれた文字
の集紙立の中首尾よくたてしるしの紙に書かれた文字
おろしるしの紙に書かれた文字

○春日をかきつりて後志をあらはしつゝ後字訓をひて
ふかしくんは極をあらはすくふ妙訓をきく也兼
集の中にも人のかきつりつゝのあすのころふかしく

○凡為僧者自引導於葬所乃混父母師長及僧徒
如其餘送葬不可趣其所是仏制而律有明文云
以香火寺名為創建壇主歸乃本朝中古之風而
名卿巨公之稱也然近世僧徒不拘士庶謾授院
号是大訛也且夫院号之下安殿宇乃叢林禪徒
所傳謬而甚無義理云

乞水戸府君源義公久昌寺小在りゆ十七条の
中なり此亦士庶の徳石牌位其ふき事及び

經衫の紐巾を替へり亦袴被仏制を違ふ乃

あやまりは若狭衣の衣帯を修多羅と名付法被の首

領を傍流と稱す謬制也花帽子は國俗尼云

の抜きて僧徒ハハを別ゆりいそ始也^裏重状に修法

の時悉徒ハハをきく用ひて後世礼義と云ふの

あやまりは玉璽をけり本衣をなすい亦法を修す

この、すゝかを釋氏得てすふ悉く其の、

○さいの河東地帯の事前々北人乞之概州の僧徒
ホルとくく世のつゝ冥途の、あやまりこの、
まうりそを飲食多く法にをりて後さう、
こりんとする僧徒も、あやまりいふ、

○ 風打とては好く鳥帽より心好む大徳とては布並とては
 のうの上下とては肩を袴とてはな久しくなすは云
 傳ふらふある其よりを略してとてよく喜物をしる
 秘法にかかるとは云ふ

○ 錫 錫ノ酒罈 慰 ノシアヒナリ 延喜式ニハ 緩ト書リ

練 練緯 汁 延喜式ニハ 汁物 折 折櫃

飯をやりしりしもの食をさるひてりしものを自食せし

好巧 世知ナ者ト 伊フナリ メシハメシモノナリ 委シク

好巧 伊フナリ 正是 イカニモ 不敢不肯 イカナクカテン

不管 カマハヌト 伊フナリ 不是 ソテナヒ 不採他 アレニカマ

造化他 ヨキヲシ 伊ハセ 應當道理 ソノハス 騙人 ヒトヲタマフ

所以 ソレテ 得末 エセワサ 只管 ヒタモノ

量必是 オカカ 還好 マタヨシ 倭人スヘテ 分付 イヒツケル

合手来 モテコヒ 快活 スミヤカナ意 快心 ハヤタノ

得緊 エサルト 故快的事 コノヤツナメツラシ

如鬼の如 袋を穿 妙法の言 法を説く 妙法の言 法を説く

○ 如鬼の如 袋を穿

山福やほりきあふこい

是ハ徳母のこふ有りのよあき去福の有りのを我後の

子ふくして世継子よいこせはるるは常々好徳を

受てよめりあふりしとて

徳夫の

こゝろ山すまのあしき

やうのちいもいこもね

こゝろは徳経の伏見の侍りたる

くろあやのしほ内のまきの地ふ

ゆて小神をぬきいふ

りふれをいこも

○春日井郡豊場村万松山常安寺後花園院永亨

中明義元禪師開基後柏原院大永四年甲申當

邑領主溝口富之助某云者藏田居士の爲に奉爲

を安きし世像に於て河尻あり侍云昆首羯磨天野

彫也將也阿難加葉三軀也溝口氏永歩沙一百也之
をいり買はりし

○中臣の祝詞又天降かる本ありト詔也

云くて元をいりしあり

字をいりし侍り濃州のきこり

を何とも思ひ柴也中臣枝の守義

の鄙み侍り侍り

○新橋の

かきし

かきし

是は

春秋電霞霧烟

新對

たゞの幼くもあやかりけし多岐西

秋乃あはれもれしきいふし一信

是春後秋乃秋後新對之也亦陸江の河に傳ふんしり

○尾州寺社領證印年月

△真清田宮 中島郡一宮村三百三十三石六斗

寛永十六年三月十五日 義直公

實文五年七月十一日 嚴有院殿御朱印

貞享二年六月十一日 御朱印

△萬徳寺 長野村二十四町之内の石五ヶ石五分

年早(早)之 本下出助

海五日廿七 石五ヶ石五分 村

享和六年六月十日

約井中務

文禄四年十二月廿日

秀吉朱印

正二月廿日

伊奈備あき

但乞ハ前方の備前檢地文禄元年より修らぬ國ハ
文禄四年に但し正の月ハ長考六也

享和六年七月六日

忠吉公に朱印

元和六年九月朔日

義直公

寛文七年二月十七日

光右公

文禄七年九月十七日

綱誠公

△性海寺 左脇村百石

元和七年五月朔日

義直公

寛文七年二月十七日

元禄七年九月十七日

△政秀寺

三月十日八月五日

信植判

本堂海陸修
和尚之書

二百五十九石六斗九升

元禄四年八月三日

秀吉

海東郡白濱村

元禄六年七月十日

忠吉公

中島郡下津村
百石之書

法秀寺之書

元和六年九月十日

義直公

法秀寺之書

寛文七年二月十日

自北政秀寺之書之

貞享二年十二月八日

白石法初判

元禄七年九月十七日

△國府宮

三月十八日九月七日

田中兵部右衛門

七十也云々の中納公處法有法寺法寺
可入在法寺之書

文禄四年八月十日

秀吉

百五十九

元禄七年十二月十日

奥津子古津
寺西本古津
系四古津

元和七年正月十日

義直公

寛文七年二月十日

元禄七年九月十七日

△六角堂

延正十二年九月十日

芳部町
松戸

元禄六年七月十日

志吉公十石

元禄六年九月銀日

寛文七年二月十日

長光寺

元禄七年九月十日

△大寺寺

土田村

延正十一年八月十日

秀吉 二石

元禄六年七月九日

志吉公
寺中
山本

元禄 寛文 延正

△土田八幡

海東郡

延正十一年十一月十日

志吉公 二十石

嘉永十年

奥津
寺西
東田

元禄六年

寛文七年

元禄七年

△法華寺

右形 延正十一月十日

遼勝

藏田大和守 嘉永年貢
恒勝の世より

延正四年 二月十日

伝長

元禄四年 五月十日

達性 伝長

同 延正六年 十月十日

同人 法華寺許 伝長

同 延正九年 七月十日

福島 抄紙 伝長 百石

海東郡 白濱

元禄七年七月九日

忠吉公

元禄六

元禄七

元禄七

△津島天王

正保四年四月廿日

教公

子二百九十九石六斗九合向島之内高百廿七石

五斗丹羽郡赤野村惣地二石

年号同六月二日

山口公卿右忠門

向島右忠門

乙若右忠門

寛文五年七月十日

嚴有院殿清朱印

子二百九十九石

貞享二年六月十日

清朱印

△妙徳寺

萱津

元禄七年七月九日

忠吉公 三十九石

元和

寛文

元禄

△正法寺

上萱津

石八斗三升七合香物領七畝五分社内三畝五分

返魂地惣地 是正法寺之正保二年六月十日

△光明寺

同

元禄七年十一月十五日

伊奈備前守十石

七十五石又成寺中四町四方秀吉公没収備前守

附地没収之高橋右忠門清野右忠門助橋井右忠門

三判十月十五日... 備前國時津名也

△ 実成寺

崇徳六年七月九日

忠吉公 廿五石

元和 寛文 元禄

△ 甚目寺

天保八年九月二日

田中右衛門尉 三百石

十二月廿日

為我名庫 以名能奉公清

天保十一年九月十日

松原 三十石

天保十一年九月十日

信旗

天保十一年九月十日

根村左衛門尉 伊藤新六

文祿四年八月二日

秀吉 三百石

年平... 九月廿日

福島左衛門尉

七月七日

伊志備前守捨地時文

前守備前捨地... 廿六年廿日

忠吉公制札九月五日... 有... 廿九年

新公法制札... 四月十五日

元和六年... 法意... 西保二年... 古能能滿

△ 間島藏南坊

永祿九年二月

信長 百石

文祿四年十月廿日

福島左衛門尉 廿石

崇徳六年七月廿日

忠吉公 三十石

同十三年十月十九日

彦坂九三忠光正
中野七三
伊志備前守忠次

元和以後法憲年

但元和六年 寛永十六年正月百 寛永七 元禄七

△蜂須賀蓮華寺

天正八年十月八日

原彦十郎武正

蜂須賀阿波守屋

六十石任地百姓
三人分持備

惣領阿波守忠次福善院 兩筋状系屋、理中守

辰十月十日

奥津子右衛門
古西友左衛門
系田右衛門

同十三年十月

伊志備前守

△奥善寺

元和以前法憲年

寛永十三年九月廿八日

中野七三
彦坂九三

田畑一町五反歩 分米十七石八升八合 津文

同十三年十一月廿日

海部山十郎
酒井名左衛門

海部親一以信内

彦坂九三
津文

津島車田武田四町八反四畝五分 寛永十三年十月十日

海部山十郎
酒井名左衛門 津文系保村車屋又右忠門 元禄十三年六月廿日

○野田村密藏院

文福四年八月三日

秀吉百廿七名七斗九升

元弘元年七月九日

志吉云

元弘二年八月廿八日

台徳院云法華寺

寛永元年七月廿五日

義直云

同十二年十一月九日

大猷云

寛永五年七月十日

嚴有云

貞享二年六月十日

御朱印

△龍泉寺

多羅池新田灯明田
言付大寺村傍

申十月廿日

彦坂九名

中野七名

伊奈備前寺

義直云
多羅池新田
二十九名

元弘七年九月廿日

龍泉寺別當大行院有之

寛文二年二月十日

光友云

元禄七年

△正覚寺

今性高院

但法洲云性高院
性高院云

享和元年七月十日

志吉云

右田村
百名

元弘元年九月廿日

義利云

寛文七年二月十七日

正法寺云性高院

△長久寺

享和元年七月十日

志吉云 寺の村因百名

元弘元年八月廿日

△法華寺

今の大光院也

元和六年正月法惠寺

△東照宮千石 春日井那田幡村平利村櫻佐村

元和五年九月廿七日 義利公 珍祐法下下 有之

寛文七年二月十七日 法惠寺之北寺寺之有

元禄七年

神皇御代御之通二月十日法惠寺法代之通之

△九坪平田寺

元和六年九月廿日

寺之北寺法代之

△正眼寺

丁亥九年七月廿日

義晴 百石五斗

永禄五年二月廿日

信長

丁酉十年八月九日

信雄

同十八年九月九日

田中兵部右衛門督政

文禄四年八月廿日

秀吉 四十石五斗

崇子廿六日

忠吉 四十石五斗

元和六年正月

法惠寺

△水野定光寺

元和八年八月廿日

義利公

寛文二年正月廿日

光義公 九石五斗

應安山領寄附事

高百三十石

尾州春日井那田幡村

高百七十石

同郡 下中田川村

右所寄附之紙地也可有收納也出山而多也從
二位前更相尾陽侯源朝公之威灵之廟也寄附
之云云之字新考也仍收如件云々

寛文七年 元禄七年 法皇下

△小松寺并遍照寺

丁酉七年六月

伝長

同十年八月十日

伝旅 三十二文

同十八年九月十日

田中名部大輔吉政

同廿二年二月十日

吉田修理亮徳次

七月十日

法皇下 友省 吉原 入
道 法皇下 法皇下 法皇下

態中

一 海志郡甚目古以之事 田村内三百名取込別事

一 海志郡名古為村内三百甲八石五斗五升五合

一 喜日井郡山松二百廿石五斗五升五合

右任法皇下 旨下 門法

一 為替地丹羽郡言原村之内二百廿石五斗五升五合

少了村内四十五石九斗五升五合 同郡加子村和由村

内二百廿石五斗五升五合 同郡加子村和由村

此以恐之誤也

八月廿一日

福大夫振

長大養正
増右 長盛
民法 玄以

九月十日福島左忠右美前別山松古飯區至板子
春日井船山松古村

百姓中

文祿四年八月旨

秀吉 二百廿七石

十月十日

石田右忠門
古西右忠門
加藤四右忠門

丑十二月八日 伊東備前守檢地之儀出御文

奥森吉高直

國府助之近臣

元和七年八月 二百四十二石 法宗下

△法皇御所 河原村之在 寛永七年二月十日
法皇御所之在 河原村之在

元和七年三月 志吉公 北石

△山王領 二十石 河原村

午二月十日

奥津右忠門
古西右忠門
石田右忠門

孫八郎友

元和八年七月十日 義直公 法皇御所 第廿四代

上畠神明制札

元和十一年十二月

信雄

同十八年八月十日 秀吉 孫八郎友

甲地一所 法皇御所 宛名 中納言 殿 有之

同進九月三日

長七十月六月節

元和八年七月十日

△退休寺

元福八年二月十日

△大永寺 石七斗八升

源朝之寺一石の... 法惠寺

△大森寺 二百石

寛永十一年二月十日

元福三年午六月十日 石七斗八升

石村圓新田石九斗四升

田中宗能少輔治文

忠吉公

新法惠寺代 二百石

細成公福元先代 二百石

石田伊能先代 二百石

光友公法惠寺 大森新田松山 堀内十町五反

元福三年午六月十日 石七斗八升

石村圓新田石九斗四升

石斗九升

同七年

△^{小折}久昌寺

元福四年九月十日

長七十月六月節

元和六年九月節

△^{犬山}瑞泉寺

文祿五年四月十日

長七十月六月節

元和七年六月十日

誠公法惠寺

秀吉 五明村石百六十石

秀吉 犬山寺石の内

忠吉 伊志備前檢地

△^{犬山}八幡并 白山御領宮三所御領 蓋御是欽神田五反

元和七年三月廿七日

小笠原和光

△茶師寺

元和七年十一月廿七日

小笠原和光 あて名 宝光院

廿七日甲子

志水甲斐守 あて名 宝光院

△二宮 定制 元重七月

信重

元重十年八月廿七日 信重 花押あり 田畑十五町二反餘

元重十二年七月廿七日 定制

元和七年八月廿七日 酒井左衛門尉忠次 あて名 八月廿七日 田

元和七年八月廿七日 武亦一 あて名 十月甲子 羽柴左衛門尉秀政

元和九年六月十日 二名 飯沼 信也 小笠原監物忠重

元和九年六月十日 信重 二名 飯沼 信也

元和八年二月十日

義直 あて名 百三十七石

元和九年九月廿七日 法親 あて名 百三十七石

元和七年七月廿七日 法親 あて名 百三十七石

△寂光院 法麿尾

法麿尾

一町五反の法文 あて名 丹羽

元和七年八月十日 市会 あて名 則成 丹羽

元和八年九月十日 信長寺 あて名 領法文

△總見寺

元和四年八月十日

秀吉

中島郡船越村八百六十石 あて名 丹羽

町内四百六十石 あて名 丹羽

原田吉西 あて名 三刺之状

寛永六年七月九日
元和六年九月廿日

忠吉公
丹波郡南条郡村
之内三百石云

△新正寺

文禄四年八月廿日

秀吉
丹波郡赤目村二百三
十九石九斗六升

伊奈備前守捨地状
延享元年正月廿日

義直公

寛文七年正月

法代
自此新正寺云

△妙興寺

文禄四年八月廿日

秀吉 二百廿七石七斗九升

寛文七年正月

忠吉公 二百石有

同延七年七月廿日
法代文
丹波郡赤目村

元和七年

法代

△曼陀羅寺

文禄四年十一月廿日

秀吉 二百四石五斗

奥津寺西原田三判
延享元年正月

寛永十三年十月十日
彦坂九石米中野七石

伊奈備前守三判二百廿一石有也

元和七年

法代

△天王坊

天正七年九月廿日
藏田邊憲法之宛名
三坊民
天正十一年八月十日
信雄買俵八丁
但三十五石云
信雄寄書状一紙
二百廿五石云

三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に
三正十八年九月八日 田中兵部左衛門吉政公に

△万松寺

文祿四年八月廿日
元和六年九月廿日

秀吉 三百四十八石
法代

文祿四年九月廿日

秀吉 五百六十九石計七石

崇禎元年五月廿日

忠吉 二百石

元和六年九月廿日

崇禎元年四月廿日 二百石寄附

寛文七年八月

法代

△笠寺

備前檢地之時 袴田菅を米並次より引取一區
彦坂九倉米伊太備前古檢地を此共々十四石三
月廿下田畑合一町八反九畝四分一厘 右之寄附

△高岳院

延文四年正月廿七日百石自北法代
尾

寛永二年十一月廿一日百石自北法代

享和七年七月廿百石平岩自北法代

△白林寺百石

享治元年十二月十七日 法代

△東照宮御祭礼領 二百石

享和二年四月銀目法代

△^{熱田}誓願寺 百石

元和九年五月十八日 法代

△戸部天王 百石

享和十二年正月十日 忠吉公

元和六年自北法代

△相成寺 二百石

寛永七年七月十六日從二位行權大納言源經臣押

自北法代

△建中寺 百石

享和二年正月七日 法代

△熱田社命

享和十八年九月十日甲申各給左補吉政百七廿二百

十文 八座之内 六十八廿百四十文 須賀之内 百三十二文

百七十五文熱田之内百廿五文於倉四百八廿

永祿九年十二月信長 長川分七世 浅井四郎左衛門

氏之 三 正二年正月十日信長 秋吉七代

是右正月信長文 正四年正月十日信忠同年同

時 信長分七代 右之 信長 右之 信長 右之 信長

目之 信忠 同 信忠 信忠 信忠 信忠 信忠

右秋 信長 分 信長 十 信長 四 信長 文 信長 是 信長 信 信長

右之 信長 信 信長 信 信長 益 信長 正 信長 四年七月信長

浅井四郎左衛門同如子 信長 正 信長 四年七月信長

百文 信長 文 信長 多 信長 一

正 信長 十二年三月 信長 右 信長 信 信長 判 信長 三 信長 百 信長 文 信長 同 信長

小笠原和光 信長 状 信長 一 信長 通 信長 野 信長 並 信長 村 信長 后 信長 子 信長 林 信長 上 信長 作 信長 信 信長 忠 信長 守 信長

文祿四年八月信 秀吉百身 信長 在 信長 本 信長 附 信長

同 信長 海 信長 東 信長 郡 信長 中 信長 内 信長 百 信長 身 信長 石 信長 三 信長

寛永五年七月 信長 信 信長 公 信長 法 信長 朱 信長 布 信長 七 信長 百 信長 七 信長 石 信長

同 信長 十 信長 二 信長 年 信長 十 信長 月 信長 九 信長 日 信長 大 信長 歎 信長 公 信長 法 信長 朱 信長 布 信長

寛文五年七月 信長 信 信長 有 信長 公 信長 法 信長 朱 信長 布 信長

貞享二年六月 信長 信 信長 朱 信長 布 信長 法 信長 朱 信長 布 信長

△ 信長 祐 信長 福 信長 寺 信長 四 信長 十 信長 石 信長

寛文七年二月 信長 信 信長 代 信長 一 信長

△ 信長 岩 信長 屋 信長 觀 信長 音 信長

正 信長 十二年八月 信長 信 信長 吉 信長 法 信長 文 信長 田畠棟後

同 信長 時 信長 八 信長 月 信長 十 信長 四 信長 日 信長 信 信長 村 信長 与 信長 名 信長 忠 信長 光 信長 政 信長 信 信長 村 信長 志 信長 名 信長 忠 信長 廣 信長 信 信長

傳治次右忠門右忠傳村傳助光承四判延文
元七年十二月十八日 伊奈彦坂捨地状 廿石

△延命寺

延文十一年九月七日 十九石四百七十八石

△法壽院 二十石

八月十下上田法壽院水野惣右衛門及法伴作左

元七年七月廿四日 伊内茂右忠門親右因惣右衛門

△^{左側}總心寺 十一石

元七年七月廿四日 延文十一年

△^{棟並}大御堂寺

文福四年八月廿日 秀吉 百九十四石

延文四年七月廿日 法惠寺

△^{緒川}乾坤院 十一石

延文七年七月廿日 法判 延文八年通院為法判

供 富田左助 早川孫右忠門

證人 須田左次右忠 野村右忠門

延文七年七月廿日 延文八年通院為法判

水野和泉右親重物入米百俵 斗俵 寄在状

延文七年七月廿日 延文八年通院為法判

斗俵

元初七年五月廿日 延文八年通院為法判

△^{緒川}善導寺 八百五十文

元文二年三月八日

信元 朱下 水野下野也

元禄十一年八月廿一日

体内親若因正書二利

同日十一年五月十日廿一日九斗六并佛徳田終文

奥は古西系田二利

元和七年五月廿一日

法代

△常樂寺

五十八石三斗七升八合

元禄十一年六月寺より出火

家康公亦涉詔下代以前量恒の時終失くす

△東龍寺

大野村の内西中石

元禄七年六月寺より

大権現 内大臣御朱印

元和七年七月寺より

台徳公以来法代と法代下

△加藤圖書助代と御朱印

孝長八年九月六日百四十石三斗八升領を初る

元和二年十二月廿一日

台徳公自北法代と法代下

國没免許法代判 三十四二年二月廿一日 大権現

初より但元禄七年九月十七日 誠公重之

△^{名古屋}若宮領

百石

元禄二年正月十八日始 法代下

△教順寺

三十石

元禄十一年七月廿八日

△淨圓寺

三十石

元禄十一年七月廿八日

△清淨寺

大室新田十町

元禄十二年十月廿五日

室永七郎二月廿七日任先法州法惠寺納下

右の外知多那大高村長壽寺初て法永章納下



